

## 尊敬

汝の妻、汝を尊敬せりや  
汝の夫、汝を尊敬せりや  
汝の子、汝を尊敬せりや  
汝の親、汝を尊敬せりや  
尊敬を人に強いるは凡夫なり  
一切を尊敬するは菩薩精神なり  
尊敬する者はやがて尊敬せらる  
人を尊敬せずして之を人に強ゆ  
威圧暴力人の心を動かし得ず。

聖光第七号に「尊敬」を書いた。今重ねて、これを書く。

人間は尊敬したい動物である。驚くほど尊敬したい動物である。二千五百年古に印度に誕生された釈尊を拝んだり、七百年も昔に現われた聖人を、我が師父として仰いだり、よくよく拝みたいのが人間である。その人間が尊敬しないとすれば、そこにはとても重大な原因がなくてはならない。それについて一二を語る。

一切を尊敬するは菩薩精神であり、尊敬を人に強いるは凡夫の我執である。如来を通して人生を見る時、一切人は平等である。平等である人を、差別つけて見て行こうとするが故に、人の尊敬を失ふのである。差別だけを見る人は、自分の立場のみを言い張って、他を権力で圧えつけようとする。外面は従ったようでも、内心は反抗している。

世の隅っこで泣いている人がある。長い間、世の荒波に虐げられ、悪業に弄ばれて、誰も彼をかえり見ない。もしその人が誰かによつて、人類平等の慈愛のもとに抱かれたら、彼は必ずその人の前にひれ伏して、その人を尊敬するであろう。釈尊の偉大はそこにあつた。釈尊の御眼には、一切人類は平等に映じた。したがって卑められた者は高められ、高上りした者は引き下げられた。この釈尊の真精神に生きる者は、世の尊敬を受けるであろう。それに反してあくまで迷いの心を尺度として、差別を人の上に見て改めざる者は、必ず人に軽んぜられるであろう。

人は誰も悪心より遠ざかりたい。然るに人の心より常に悪心を引出す者は、人の願いに遠ざかるが故に必ず人に侮られるであろう。

世の宗教家にして、高座より人の欠点をあげ、いたずらに非難し攻撃して、己れ一人得々たる人がある。仏心を与えるかわりに三毒煩惱をおこさしめて、人を繋がんとなすればするだけ、人の心はその人より去つてゆく。自分の学問を鼻にかけても、自分の地位を言い張つても、他人の欠点を攻撃しても、それでは決して人の心を得ること

ば出来ない。ただ真実のありだけを打ちつけて歩む時、求めずとも世の人は尊ぶであろう。真実のみ人の心より真実を引き出すが故に。

人に侮辱された時、人に見下げられた時、怒ったり、非難したり、逆怨みしたりすれば、更に人に馬鹿められるであろう。合掌して受け取るべきである。必ずその中には汝自身を養うに足る何物かがある。

もし汝がまことに持つている欠点をつかれ、忠告され、非難されたのにもかかわらず、怒って言葉を返し、かえって相手をやりつけて受け取らないならば、汝自身も救われず、相手もまたおさまらぬであろう。苦き忠言の前には合掌して謹んで謝すべきである。

誰でも遠来の客や、時々会う人や、遠慮の人や、目上の人の前では、己れを謹む。しかし毎日一緒にいる家内や、心安い人の前では、油断して、道を外れ、放縦を行い、念仏修行の相を失う。これが汝をして世の尊敬を失わしむる根本である。恐るべきは、汝の親であり、妻であり、夫であり、子供であり、兄弟である。一世の尊敬は得られずとも、まず汝の家族をして、真に尊敬せしむるに足る生活者となれ。

仏は一切衆生を拜むが故に、一切衆生は仏を拜む。たとえその敵となる衆生すら仏は拜む。さればその仏のみ、心がとどく限り、仏の前には悪人はいない。ことごとく仏性に輝く善男子善女人である。

今地上から去るにしても、一人として根本的に悪まねばならぬ人はいないまでに、2  
汝は汝の全てを知つて暮すべきである。怨みや、憎しみは、汝を泥土に棄てることである。仏は「忍者に怨なし。」と言う。

人に尊敬されることは容易いことである。人に尊敬せられる道は易行道である。その易き道を行く人がないのである。更に、人に尊敬せられることよりも、人を尊敬することはもつと容易い道である。その易い道を歩む人が少いのである。

甲の地においても乙の地においても、如来の前に頭を下げ、自己の過去の醜悪な歩みを懺悔し、現前の逆悪の相に覚めて大地に手をついた人は、それを見るものをして悉く合掌せしめた。人は懺悔の人を責めず、笑わず、馬鹿めず、必ずそれを尊ぶ魂の持主である。私は昨日も今日も唯そのことを事実の上にたしかに拝んできた。

如来の智慧光なくして、汝自身を知ることが困難である。汝自身を知らぬ限り、慚愧の心はおこらない。慚愧なきものは畜生である。畜生を拜むものがあるだろうか。慚愧は仏心である。仏心より外に衆生は拜まない。

海につかつて泳ぐ時には、一分一秒だつて油断はならない。波が押し寄せた時、言いわけしても、はねのけても無駄である。絶対絶命、波そのものを受け取ることよりほかには許されない。仮に第三者の位置に立って考えたり、自己を波から抽象たりすることは出来ない。

我等に許されたことは、ただ如実に人生の全ての波を領解することのみが許されている。合掌の相は一切の波をそのままに領解する相である。

柳は緑、花は紅とは、天地の実相そのものである。煩惱の欲は、天地一切の相を我が要求の如く改めようとする。しかるに法蔵の願心は、天地のありのままの相を静かにその大心海に摂取して、火の中にも、毒の中にも、火なるが故に、毒なるが故に、ますますその本性を發揮し、顕現してやまぬのである。懺悔したもうも、合掌したもうも、忍従したもうも、全ては法蔵の願心にてましますのである。尊の字も、敬の文字もことごとく煩惱に属すべきでなくて、如来法蔵の願心の相に外ならない。

一切を尊敬する心は、一切の上に、尊きものを拜むことである。一色一香、中道に非ざることなく、煩惱の心がいかに勝手わがままを求むるとも、一切万象はそのままであつてのみ、よく我等が上に念仏の大道は發揮せしめられ、念仏無上道に生きてのみ、一切を受け取って領解することが出来るであろう。かくて念仏道は自他一切の生かされる道であり、全てが一に融けた世界にのみ、真の尊敬が成就されるのである。

ああ、尊敬の二文字は、弱肉強食、相殺相害、威圧暴力、瞋憎の火炎、貪愛の水波、嫉妬反感、自暴自棄、等々の苦毒の中に立って、よく忍従し、常勝したもうものの相となつて拜まれて来る。南無阿弥陀仏。